

Timon of Athens の一解釈

中 道 正 子

Shakespeare の *Timon of Athens* もまた、他の Timon 劇の例にもれず Misanthrope として忘恩の友人を、はては自己をも含めた全ての人類を憎み通してその幕を閉じる。

Aristophanes, Antiphanes 等、Timon を描いた作品は古く、そこからヒントを得て書かれたと思われるものに Lucian of Samosata の *The Dialogue of Timon* (1) がある。これには、Timon がおちぶれて友人からひどいしうちを受けたあとの様子が、Timon, Poverty, Mercury, Riches 等の間でかわされる会話の形で描かれている。ここでは Timon は一種のパターン化されたものであって、貧しい身で悟ったかにみえた善よりも、同時に抱いた憎しみ、恨みが、再び Treasure を手にした状態で開花するさまを描くことによって Misanthrope としての性格をよりはっきりと示し、いかえればいちまつの疑問も残さない。しかも "Jove has ordered it" で示されるように Timon の運命は "Jove" という最高権威者によって決定される。全体としてのテーマ内容より、それぞれのいい分をこまかくのべたてる会話そのものにおもしろさのある作品である。

Elizabeth 朝の作品で作者不詳の *Timon* (2) がある。これはそれまでの多くの Timon 劇とくらべて、はるかに Shakespeare の *Timon of Athens* に近く、両方とも Timon の繁栄時から話をはじめて、それにかなりの場をさいている。批評家達によって、年代推定に多少の差はあるが、結局 "どちらかを参考にして書いたものであろうし、おそらくいつかその共通の source が見つかるだろう" (3) といわれているものである。細部にわたっての劇の進行状態、エピソード、言葉等、ほとんど同じといってもいい程で

あるが、もちろん違っている点もある。Shakespeare の Timon をみるまえに、この“よみ人知らず”の Timon を少しみてみたい。

Anon. の Timon は、金持ちの Timon とその忠実な召使いである Laches との会話からはじまる。

お金の話であって、“私の持っているたくさんのお金を何なりと持ってゆくがよい。このタイモン家から人が貧しいまま出てゆき、悲しむなどということはさせない”という冒頭からして、我々は Timon の、お金でもって人と交わるにあたっての態度を知る。しかし Laches は忠実な召使いらしく身のほどをわきまえて“適当にしめた方がよくはないか”と遠慮なくいう。地位の上では彼を slave としてしかみていない Timon は口出しを許さない。彼の耳はひたすら彼の寛大さをほめたたえる天にも届かんばかりの人々の声を聞こうとし、心にそれを聞く神々の姿を想像する。当然のことながらお金を必要とする人物があらわれ、Timon はお金を与えたのみならず、彼を食事に招待する。Laches はこのあと主人のいましめにもかかわらず、みるにみかねて口をさしはさんだため、ひどく打たれた上に追い出されてしまう。

Master, Farewell. Is this my loves reward ?

と言いながら出てゆく Laches に Kent あるいは Cordelia の姿が、そして登場人物の一人が、実は暗示にかかっただけなのだが、変装した Laches に目をくりぬかれたと思い Timon の家につれてってくれるように頼む場面に Gloucester の姿が重なり、Anon. の Timon と *King Lear* との関係と、そこから、Anon. の Timon を *Lear* のあと、さらに Shakespeare の *Timon of Athens* のあとにおく説がある⁽⁴⁾がともかく Laches は、

My face I have disfigured, that unknown

I may again be plac'd in Timons howse

とのべて、かげながら忠実な召使いのままでいることを宣言する。

Timon はしかしお金持ちの少々わがままな人物だけではなく、すでに他の人と結婚することになっていた Callimela に恋をするのである。しかも持参金なしでいいというので、お金持ちのくせに大変なケチの父親 Philargule は娘に“こちらの方がはるかに金持ちだ”と乗りかえることをうながすと、娘も娘である。

Who doth possesse most golds shall mee possesse.

しかしそんなこととはつゆ知らない Timon はよろこび輝いて、そばで fiddler も Epithalamion をうたいはじめる。そんなところへ Timon の船難破の知らせがくるのである。富とよろこびの絶頂にいた彼は、たちまちのうちにあわれな貧しい Timon に場をゆずる。去ってゆく Callimela にいうセリフ

Wealth being lost, the love which was remains

また

Doth noe small sparcle of thy love remain?

Timon の嘆きは、貧しさをどうやって耐えていけばよいかわからないというお金がなくなったことそのものに対する動揺がなくはないが、

She's gone, shee's gone indeed.

O most inconstant sexe of womankind,

Is this their faith full love? the vowes they make?

と叫ぶように、自分が大変な寛大さの上に純粋な love をもって求めた Callimela の裏切りに対する方がはるかに強い。援助を求めた友達に知りあいであることを否認され、からかわれ、Timon の心は忘恩に対する怒りでいっぱいになり、復讐の心から、最後の宴会を開いてごちそうに見せかけた石を彼らに投げつける。一方、忠実な召使い Laches は姿をかえて再び召使いとして Timon につかえるようになってのちも唯一人 Timon のあとについてくる。

however fortune play her parte

Laches from Timon never shall depart.

嘲笑のさなかに Timon に心から同情するのも彼だけである。

I will not see my master thus abus'd

I'll rather die

そして、彼にむかってどこまでもついてゆくことを誓う。

I'll follow thee through sword, through fire and death;

Laches だからというのではなく、自分をも含めた人間全てを憎む Timon は、いかに Laches が忠実を誓おうとも彼だけを例外的に許すわけにはいかない。それほどまでに言うなら、憎むことにかわりはないが、ついてくるがよいと念をおして一応 Laches と和解する。二人で土を掘るうちに見つけた金の使い道についても、憎しみのもとであるそれを海に捨てようとする Timon に、復讐のために使う方がよいと入れ知恵するのは Laches である。やがて、金を再び flattering の限りをつくすが、Timon の怒りと憎しみとがとけないうちにこの劇はおわる。

結局 Timon のそばには最初から最後まで召使い Laches がつきそっていた。Timon は決して Laches に自由に言いたい放題をいわせていたわけではないが、おそらく「未詳の作者」の意図が Laches をして追放されようと、どんな怒りを招こうと、自分の言うべきことを言い、Timon のためなら一緒になって人間 — すなわち、自分の肉親を憎むことさえ誓わせただろうか。劇が進むにつれてますます Laches のかげが濃くなるのを見る。この Timon の悲劇において Laches のはたす役割は大きい。

Timon が彼を、結局は常にそばにいていたということによって Timon と、それを舞台の上の人物としてみる私達の間に、ある程度の距離をもたらしたことで、そして Timon の不幸の直接の原因がここでは船の難破というどうしようもない出来事による破産であることがあいまって、この劇はある種の、どうにもならない運命の波を描いたものになっている。

しかも、そのメッセージは、登場人物の一人 Speus がいうセリフ

Man's like unto the Sea that ebbs and flows,

And all things in this world unstable are.

にみられるように、" *Timon* という劇の場をかりてその二行をいつか言いたかった"、そういう気がしてならない。もちろん、これが、*Timon* の立場を説明するものでもあり、また、その財政状態に応じて、よせてはかえす人々の波を示したものであることは言うまでもないが。

こういう一つの劇をみたあとで Shakespeare の *Timon of Athens* (5) に目を移すと、よく似ているだけにかえって違いが興味深い。

Timon of Athens は場面が *Timon* のところへ草木のようになびくさまざまな人々を配することによって直接に出すよりも強く *Timon* の裕福で寛大な様子を描くことから始まる。*Timon* は本人登場の前に "large fortune, good and gracious nature" と描写され、その前では、れっきとした flatterers はもちろん "あの Apemantus" でさえひざをおる。といわれ、徐々にその姿を浮きぼりにされる。待たされている観客の心には、すでに英雄を迎える準備がととのっている。やたらとお互いをほめあい、にぎやかにちらつく Poet, Painter, Jeweller, Merchant 達、しかしその一見無害ともみえる一団のセリフには、この劇の一さいの説明がおりこまれ、*Timon* がたどることになる道がかさねがさね皮肉って示される。そのあとに *Timon* が登場するのである。多分ゆったりとした足どりで歩いているだろう *Timon* のまわりをとりまく訪問客、召使い、使者などのむねは、繁栄をほこる *Timon* の姿を一目瞭然たらしめてるに違いない。

I am not of that feather to shake off

My friend when he must be. (I. i. 103-4)

'Tis not enough to help the feeble up

But to support after. (I. i. 103-4)

anon. の *Timon* と同じ出足である。それに加えて *Timon* は、ただ寛大さのあまりむやみやたらと手をさしのべるのではない、

I do know him

A gentleman that well deserves a help. (I. i. 104-5)

という。また Painter, Jeweller 達に対するほめ言葉とあいさつをも忘れない。Flatterers が Timon をよろこばせるすべを知っていると同じく、Flatterers を扱うすべをもよくこころえている Timon である。

こういう群れの中へ、一風かわった Apemantus がやってくる。彼のセリフはあまりにもそのものずばりの切実な皮肉でいっぱいであり、ことあるごとに Timon に何かを悟らせたいと思っているかのようにみえるが、彼と Timon のやりとりはいつもずれてしまう。Timon のみならず、Apemantus を “he's opposite to humanity” として一言で片づけてしまう Athens の雰囲気の中に Apemantus はうまくおさまらないのである。Apemantus と周囲のやりとりが微に入り細にわたって言葉の遊びの形をとっているのも、みるものの注意を Apemantus と Athens の不調和に必要な以上に引きつけないための方法でもあろうし、したがって読者および観客は何の抵抗もなく Athens の雰囲気に招き入れられ、Apemantus を外来者とみることができよう。冒頭の Painter, Poet の鋭いセリフ等も同じ扱いである。ある時ふとそういう重々しいかけがえすことはあってもたちまちのうちに場面が変わり、あるいは一般化してしまう。それに Shakespeare は彼らを通して Timon の運命を説明し、注釈するが、彼らはまた Timon と同じ舞台の上に、しかも Apemantus と対立する Timon 側の、さらにその中で Timon を相手にする登場人物であり、Flatterers として名をつらねていることも彼らの忠告めいたセリフの効力を失わせているに違いない。

第二場は豪華な大宴会場である。ここでは Timon の友情についての意見がかなり強調されてのべられている。がそれは Timon の友情に関する考えであると同時にそれ以上に、あとになって見事に裏切られることへの伏線として必要以上に強調されているものと思われる。

まず、Timon の援助によって救われた Ventidius がその金を返そうとい

うのに対して「私はそれをあげたのであって、もし返してもらえば、本当にあげたとはいえない」と答え、さらに礼儀についても「本当の友情あるところではそんなものは必要でない」といったあとで、「いつか自分が友達から大いなる援助をうけるだろうということは神々によって定められている」「友達の助けを必要としないならば、どうして友達を持つ必要があるのか」「友達の財産を兄弟のものであるかのように使いあうことができるのは、何と貴重なよろこびであろうか」等々、よろこびのあまり涙が出るほどまでにそのようなことを言う。

仮面をつけた ladies が楽器を手にあられるにいたって banquet はさらににぎやかになるかと思われる。が底なしとも見える Timon の財力も、それ程はてしなく続くわけはなく、すでに Timon の知らないところで steward の Flavius はいう。

There is no crossing him in's humour,
Else I should tell him well, i'faith, I should,
when all's spent, he'd be crossed then, and he could,
'Tis pity bounty had not eyes behind,
That man might ne'er be wretched for his mind

(I. ii. 156-160)

とすると、Timon という人物はお金にまかせ、地位にまかせ、Flavius のいうことよりも自分の“気分”を優先させていた人物なのだろうか。実際 Flavius が「あなたに大変関係のあることでひとこと申しあげたいことが」ときり出すと、Timon はいう。

near? Why, then, another time I'll hear thee

(I. ii. 175)

そんな Timon がとうとう自分の状態に気がつく時がくる。どのように話して納得がいったものやら知るよしもないが、はじめて財政状態を耳にした Timon の最初のセリフである。

You make me marvel whenfore ere this time

Had you not fully laid my state before me,

That I might so have rated my expence

So I had leave of means. (II. ii. 128-136)

自分でも言うように Timon は本当に知らなかったのだろうし、Flavius がもう少し早く、しかも、とくに自分が聞く気になっていない時に限ってではなく、言ってくれてたならと、本気でそう思ったのかも知れない。ひかえ目すぎた Shakespeare の Flavius は anon. の Laches とは違うのである。anon. の Timon の不幸のはじまりが難波という災害による人生の ebb と flow のあおりによるのに対し Shakespeare の Timon の不幸は Flavius のセリフ

Prompted you in ebb of your state

And your great flow of debts. (II. ii. 145-6)

にみられるように、一方で、実際はないのに自分ではあると思いこんでいた Timon の無関心に、他方で、最初から寛大さをみせるたびに言及するように、決してむやみやたらとほどこすのではなく、それ相応の理由と資格があるから当然のことをやるのである、しかも友達ではないか、といった彼なりの理屈ができあがる考え方等を含めたくいちがいの ebb と flow にある。友達がたくさんいることが金銭にもまさることは Timon に聞くまでもないが、まわりに人が多くいるからといってそれが全て Timon の考える友達だというわけではなく、また、友達を助けることが当然であるのは理想であっても決して現実ではない。どちらがよいか、正しいかの選択の前にそれらを知らねばならない。

Nevermind/Was to be so unwise, to be so kind (II. ii. 5-6)

Being free itself, it thinks all others so (II. ii. 238)

Flavius がのべるこれら二つのセリフの中に、Timon に対する全ての説明がなされているように思われる。人生には、また社会には上げ潮と引き潮

があるという普遍的確認のみならず、それをあるがままに把握しない者として必要以上の高潮に翻弄されている Timon をみるのである。

また、無関心と寛大さは、善良さというものを裏返しにした自分勝手さが度をすぎたものでもあり、嘆く時にはその片側、善良さの面だけを盾にとるものだから、不当なしうちをうけたものとしてのひびきだけが大きく残る、ということも Timon 自身気がつかねばならない。もともと Timon の一人よがり、つまり友達であり、友情があるといいながら Timon 自ら彼らに対する真の理解もなく、flatterer を身をもって率先していたそのまぼろしの友情が Timon の急場に役立つはずはない。ことごとくお返しの援助をことわれ、つめたくあしらわれた Timon は激怒し、復讐のために今一度 banquet を催し、料理とみせかけた石を投げつけて Misanthrope となることを宣言するあたり anon. の Timon と同様である。

Anon. の Timon で、Timon と召使い Laches が最後まで結ばれていたことを考える時、ここで思い出さなければならないのが Steward の Flavius である。追い出されてもおついてきた Laches と、Timon の方で出ていったのをどこまでも探し出し、ついていこうとする Flavius と、いずれも Timon についていこうとする態度に変わりはない。その Flavius はいう。

Is youd despis'd and ruinous man my lord ?

Full of decay and failing ? (IV. iii. 462-3)

人を心から信じ、案じているものにとって、その心身ともにおちぶれたさまを見るのが自分の苦しみ以上のものであることはよくみる例である。*King; Lear* において Cordelia が歴然たる善を象徴するものであり、Lear に何とかして救いを見出そうとするものは当然二人の最後の結びつきを期待する。が Timon と Flavius との結びつきを考えた場合、Flavius の忠実で正直な心を Timon は認める。しかし Timon が再び繁栄することを願っていった言葉をとりちがえた Timon は三度、目の前にあらわれなくてくれといいい残して洞窟の中へ入ってしまう。

これは Flavius にとってはある意味でひどい仕打ちである。が、Misanthrope としての役目をこなしている Timon にはことごとく人間を排する必要があり、理由あって憎まれる人はともかく、Flavius のような誰がみても忠実なものは、その行き先が非常にあいまいになるところであった。Timon が彼のセリフを誤解し、Flavius でさえあいかわらずお金を望んでいると思い、じかもその望みのものを与えた上で解放したことは、何よりもまず Timon のまわりから Flavius までをも追い払うこと、それによって Timon が “無理なく” 一人になれたこと、しかもこんどは無知な寛大さではなく、どん底にあってなお Timon の “与える” という動作を示したことの二つの意味で救いにいたる道を暗示するものとして意義ある場面のひとつに思われる。

Anon. の Timon が突然ふってわいた不幸にあって、観客に訴えるというよりは、“どこまでも忠実” な Laches と手に手をとって舞台のそでに消えていったとすれば、Shakespeare の Timon はもう少しくらか自分の手が加わって不幸を招いた。そこには Flavius が負うべき責任はなおさら何もない。というよりも Flavius は Laches のように主人と一体になれなかったのである。くいちがいの ebb と flow がやはり Timon と Flavius の関係にもあった。だから今やたった一人でどこまで嘆くことができるか、というのが Timon の示しうる唯一の態度のようにも思われる。

Flavius との結びつきもなく、自分がすっぽりおさまっていたと思いこんでいた Athens の常識とも違うことを知った Timon が一人森の中で食物の草の根を探しているところへ Apemantus がやってくる場合がある。草の根はあの豪華な宴会で Apemantus の常食として出てきたものである。Timon をはじめ全ての人々とくらべて “opposite to humanity” と称され、相手にされなかった Apemantus の食物を Timon が今求めているのである。そこにちょうどやってきた Apemantus と Timon との間に約 200 行に及ぶ会話がかかわれるが、それらは全て、ののしりと呪いとに満ちた、ケンカ腰の

ものであるにもかかわらず、そこに生き生きとした何かが通うのをみる。ちょうど Timon の繁栄時に周囲の人々とかわした会話が、ほめ言葉とけんそんと、一見美しいもの、感動的なものに満ち満ちていたにもかかわらずまるで空々しいただの音でしかなかったのと正反対の効果である。

Timon は人間に対する怒りとともに自分の身のかわりようを嘆くので心がいっぱいであり、Apemantus はたまたまその人間の一人として前にいあわせればかりにあびせられた雑言に同じように応えながらも、栄華をきわめる Timon の前でよりはもっと堂々といましめと助言の言葉をさしはさむ。

自分の pride をこらしめるためにそういう身なりをするのならそれもよからうが、Timon のはそうならざるを得ないのだという悪口をあびせながらも "to castigate the pride" してはどうかといいたい Apemantus を見ずにはいられない。そうでなければ、そのせっきくの試練の期間ともいべき貧しい期間は何の役にもたたず、運命にただもてあそばれて ebb and flow にのった意志のない人間にすぎないのではないかと Apemantus はいいたいのだろう。人間のおかれている状態の上下、よしあしで、幸、不幸が決まるのではなく、気持ちひとつによる、というのであって Apemantus のこの助言と、そこにこめられた願いを示すこの場面は美しいとさえいえるだろう。が Timon は不幸のまっただ中にいるものとして当然そこまではなれてみることはできない。運命の女神が常にほほえみかけ、人の口、舌、目、心が数えきれない程くっついていた Timon には、

I, to bear this,

That never knew but better, is some burden

(IV. iii. 278-9)

だという。他人の目にはよくうつることでも、本人が満足していなければ幸福とはいえないし、反対に悪く見えることでも本人が満足していればそ

れは不幸ではない、という Apemantus と、人間のひどいうちにいつも慣れている人は何も感じないかもしれないが、それまであまりにもよい目ばかりうけて、その逆を知らなかったものには大変な重荷である、という Timon、それに加えて Apemantus の

The middle of humanity thou never knewest, but
the extremity of both ends. (IV. iii. 301-2)

というセリフによって二人の、そして特に Timon の立場と考え方がよく説明されている。しかしながら、単なる道徳劇⁽⁶⁾を演じただけではないと考えたいこの劇の、悟りの場面ともいうべきこの場において、Apemantus の忠告がどんなに多くの、そして深い真実を含んでいようとも、Timon の苦しみのまっただ中でひとつずつ“昇華”されてゆく“何か”ほど真実であるものはなく、Apemantus の言葉が真実味をおびればおびる程、そして、Timon がそれにまるで関係なく悲嘆にくれればくれる程、両者の間にはそういうものをこえた本質的な結びつきが生まれてくるように思われる。この Apemantus と Timon のウソいつわりのないやりとり、そして Timon がかつてそのまん中にいて Apemantus と対立していた Athens からの脱出、そこに Timon なりの痛々しい努力の姿をみたい。

登場人物の口をかりて世の中には波があるということを劇全体のメッセージとしてつぶやかせた anon. の Timon とちがって、Shakespeare のは、そういう波にうまくのれないばかりか、波があることすら知らなかったとひたすら嘆きを重ね、それを怒りと憎しみのカラに変え、次第にその中にとじこもってゆく一人の人間を描いている。が宮殿から森へと舞台を急転させたこの劇が、いわば劇全体の“身振り”で伝える“世の中の波のあり方”は、“ことば”で伝えたものよりはるかに強く印象に残る。

Timon のために我々がこめた小さな願いも空しく、彼は洞窟に消えるがそれは、Timon が彼なりの痛々しい努力で、Shakespeare の勇気ある主人

公達と歩みを、あるいは意気込みを共にしないで *misanthrope* という古着にこだわったことによって、最後は洞窟に消えるほかはなかったであろう。彼が、はじめ自分の意識の外で自ら演じていた有と無、虚と実の *ebb and flow* が辛苦をなめることによって意識の中に入ってくるとすれば、それは、Timon が洞窟に入り、そしていつか出てくるということがあり得た時のことであって、この劇のおわりは、たとえば *Lear* の嵐の場面ということになりはしないか。そして人が何か重大なことを悟る時、その過程が、悟ったあとの知恵の何倍にも増して重要であることを考えると、Timon の終りは “*loose end*” というよりは暗示を含んだ悲劇のもうひとつの “おわり時” ではなかったろうか。大きな悲劇を一人で耐えた英雄を終始光でおった描写の中でも、特にその広大な自然の中にポツンとおかれたちっぽけで偉大な *Lear* の姿は、叫びの聲がこだまする背景が広く大きければ大きいほど一層あわれみと悲しみを強調するものである。ということを考えると Timon の最後をあっけないほど静かに見送る我々には、それがやはり “*loose end*” ではなくて、ちょうど豪華な客船をのみこんだ大洋が、浮滅するあぶくにその余韻をとどめているだけで、何ごともなかったかのように横たわっているように、その、うちに動揺を秘めた不気味な茫漠さ、耳ざわりな静けさと同じような効果を、Timon と社会、Timon と神、Timon と自然、あるいは人間と何か確実で永遠のもの、そういう関係に与えているのを見る。まさに “*a new tragic world*”⁽⁷⁾ ともいえる一種のつきはなしたような印象が残されるのである。

Notes

- (1) *The Dialogue of Timon*, by Lucian of Samosata, Geoffrey Bullough; *Narrative and Dramatic Sources of Shakespeare*, London, 1966. pp 263-277.
- (2) Geoffrey Bullough pp. 297-339. 以下 anon. *Timon* の引用は全てこれによる。
- (3) cf. *Timon of Athens*, edited by H. J. Oliver, Introduction
- (4) cf. Oliver, Introduction, Bullough, Introduction.
- (5) Shakespeare の *Timon of Athens* 引用は全て H.J. Oliver 編 The Arden 版による。
- (6) cf. *Timon of Athens*: Shakespeare's *Dr. Faustus* Anne Lancashire, *SQ* .XXI, pp. 35-44.
- (7) この言葉は *Timon* と他の悲劇をくらべて Farnham が使ったものである。
William Farnham; *Shakespeare's Tragic Frontier*, 1950.